

Vol.
003

BUNBU

関西国際学園 初等部 教育白書

Elementary School
Education white paper

関西国際学園 初等部・中等部 学校説明会
初等部学校見学・体験授業（要申込）

6月14日（日） 第1回 学校説明会

6月23日（火） 第1回 学校見学会・体験授業

7月 1日（水） 第2回 学校見学会・体験授業

7月 7日（火） 第3回 学校見学会・体験授業

7月11日（土） 第2回 学校説明会

8月22日（土） 第3回 学校説明会

▶ 9月5（土）6（日） 第1回 入学試験（内部生）

9月27日（日） 第4回 学校説明会

9月29日（火） 第4回 学校見学会・体験授業

▶ 10月10（土）11（日） 第2回 入学試験

10月24日（土） 第5回 学校説明会

11月10日（火） 第5回 学校見学会・体験授業

11月29日（日） 第6回 学校説明会

▶ 12月12日（土） 第3回 入学試験

▶ 1月31日（日） 第4回 入学試験

入学（編入）に関してのご相談は、お気軽にお問合せください。

関西国際学園 初等部 TEL.078-882-6680



関西国際学園
公式 Facebook

Big
対談

株式会社ディー・エヌ・エー取締役ファウンダー
横浜DeNAベイスターズ取締役オーナー

南場 智子氏

「失敗しないと
学ばないでしょ。」

世界初！
国際バカロレア認定！

学園長 著書より



Big
対談株式会社ディー・エヌ・エー取締役ファウンダー
横浜DeNAベイスターズ取締役オーナー

関西国際学園 学園長

南場 智子 × 中村 久美子

2015年3月30日 渋谷ヒカリエ(DeNA本社)にて

自分の力を信じないと、
自分に力をつけないと。

南場さんとの出会い

中村:最初に南場さんにお会いしたいと思ったのは「フォーブス」という雑誌を目にしたのがきっかけなんです。その間、新聞記事でもたまたま佐賀県の武雄市でプログラミングをボランティアでされているという内容を見て、ああボランティアだからそんなに金がいらないんだなって勝手に思っていて、手伝ってもらおうかなって考えていました(笑)!その後ほんとにプログラミングっていいなって思い、この方に是非ともお会いしたいと思ったんですよ。

南場:そうなんです。フォーブスはいつごろの記事でしたでしょう。

中村:11月くらいだったと思います。

南場:具体的にどのような内容か覚えていらっしゃいますか?

中村:武雄市の話だけでなく、女性起業家の特集として取りあげられていました。そしてどうしたらこの方にお会いできるかなって、考えていました。

南場:そんなの簡単ですよ!

中村:そんなに簡単じゃないですよ(笑)!いきなりお電話してお会いできる方でもないですしね。ああ茂木さんだったら絶対知り合いだと思ったんです。

南場:そうでしたか。

南場 智子 tomoko nanba

1986年、津田塾大学卒業後、マッキンゼー・アンド・カンパニーに入社。
1990年、ハーバード・ビジネス・スクールにてMBAを取得し、1996年、
マッキンゼーでパートナー(役員)に就任。

1999年に同社を退社して株式会社ディー・エヌ・エーを設立、代表取締役社長に就任。
2011年6月、取締役就任。2015年1月、横浜DeNAベイスターズのオーナーに就任。

中村: ああ、知ってるよって、すぐに電話をかけてくださって。教育にプログラミングを取り入れたい。うちでもずっとやっていることはやっているんですが、でももっと盛大にというか、DeNAさんの力をお借りして、私たちはプログラミングを教えている人ではなく、それで生計を立てている方に教えてほしいんですよ。

南場: そうですね。私もそう思います。

中村: そもそも、南場さんがプログラミング教育に取り組もうと思われたきっかけは何でしょうか？

南場: 例えば“のり”とか“ハサミ”とか、絵を描くとか、得意、不得意はあってもほとんどの人は基本的なことはできるじゃないですか。ところが“バーチャル”の世界、例えば“インターネットの世界”になると、創造活動ができる人が極端に少なくなるんですよ。それらの世界における“のり”と“はさみ”に該当するものを使えない人が大半だということが、日本の将来を考える上で問題だと思いました。それがひとつのきっかけですね。

起業について

中村: 今年で会社を設立されて何年目になりますか？

南場: 16年目です。

中村: そもそもなぜ起業しようと思われたのですか？

南場: 前職のコンサルタント時代に、ある会社の社長にインターネットオークションの事業をやってみたらどうですかと提案しました。すると「そんなに熱っぽく語るんなら自分でやれば？」と言われて…あっそうだなと思ったのがきっかけです。

中村: どのようなところで危機を感じましたか？

技術よりも何を作るのか。

南場: 最初からずっと危機でしたね(笑)

中村: 笑・笑・笑!!!

南場: 最初の4年は危機の連続でした。それから黒字に転じたのは5年目からです。

中村: そうなんですか。勇気がわいてきました。

南場: そうですか？

中村: 私も3、4年は給料を取ったことがなくて…。

ずっと投資だったので。学校なので急に収益が増えるというわけではありませんので。

南場: それは、結構お金持ちだったということですか(笑)!

中村: いや、そんなこともないですけどね。お金があるっていうより、起業ってお金がないからするんじゃないかと思うんですが。

南場: 私は、あまりお金は関係ないと思います。会社を作ったら全然お金がなくなっていました。(笑)

中村: ああ、そうですね。結構使い果たしたとか!? 儲けたお金を全部使い果たしてしまったような。

学校なので途中でやめるわけにはいなくて…。えらいことをやってしまったなんて感じています。(笑)

南場: 今はお金も集まりやすいし、小さいコストでサービスができる時代になりましたね。

中村: そうですね。昔って会社1つ作るのにもすごくお金がかかりましたよね。

南場: はい、今は何千万と必要という時代でもなくて、必要なだけの資金をクラウドで集められる時代です。ですから割と少ない金額で起業できるようになりました。技術よりも何を作るのか、ユーザーの気持ちをどうやってわしづかみするのか。わが社では、サービスに付加価値をつけてから、作った後のマーケティングやお金の使い方について見ていきます。

勇気がわいてきました。

南場:そこまでを一貫してできる人材を日本で育てていけないといけないなと思います。

そういえば、今何か新しい地域への展開を計画されているとか？

中村:今ちょうど東京の文京区と千代田区に、渋谷にも出したいと思っています。

南場:それは素晴らしいですね

本当のプロとは・・・？

中村:私たちは、教師というよりファシリテートするコーディネーターのようなものだと思います。先生から全て学ぶのはおかしいと思うんです。美術であれば、自身の作品で生計を立てておられるプロのアーティストに監修してほしいと思っています。

南場:そういう方だと、魂がこもっているから授業の内容も全然違うのではないですか？

中村:プロの人、本物の人に教えてもらうという事。あるプロのアーティストの方がおっしゃった言葉ですが、美術の先生が中学校を回って美術を教えることが仕事って、その人はアーティストではないですね。

南場:そうですね。

中村:僕は自分の絵で食べています。これを売らなければ、生活していけなくなるという空気感というか、そういう人が美術を教えるべきだと思います。

南場:思い入れや、それにかかる気持ちは全然違いますからね。

中村:来年中等部も開校するんですけども、初等部でも中等部でも1年生からプログラミング教育を必須導入して、近い将来DeNAさんで是非うちの生徒をアルバイトをさせていただいて、そのままDeNAさんに就職させてもらえれば最高ですね。(笑)!

人材採用・いまの大学・就職活動について思うこと

中村:先日、新聞で大学教育改革の特集があって、南場さんの講演の記事を読ませていただいたんですが、ああ！！本当にその通りだと思い記事の内容を職場の社員にメール配信させていただきました。その他でも人材採用についてお話されていました。内定を辞退した人でもすごく追いかけるとのことですが…？

南場:はい、私結構しつこいですよ(笑)

中村:実際、私どもも内定を出して、辞退されると残念に思う事もあるのですが…。

南場:全員ではありませんが、いつか一緒に働きたいと感じる方は追いかけますよ。

中村:何かの記事では、海外で働かれていた人を数年越しで口説いたと書かれていたと思いますが、その方の魅力的な部分は何だったんでしょうか？

南場:その人は、ハングリー精神が半端ではなかったですね。

中村:ああそうなんですか。それはエンジニアではなくて！？

南場:いえ、うちに来る前は外資の証券会社でセールスをやっていて、いつか起業して自らビジネスをつくりたい、という意向を持った人です。

中村:採用ということで、私も勤めていた企業で人事担当をしていた経験があるのですが、日本の大学教育って企業が求める人材を育てていないと思います。

南場:私もそう思います。

中村:こんな状態ではいけないと思っていました。私はあまり学校が好きではなかったので、日本の教育はもういいやという考えになって、受けない権利も持つべきだと思います、株式会社で学校を運営してもいいのではないかという気持ちで始めました。そこで南場さんが、こういう人材がほしいというものがありましたら教えてください。



南場:シリコンバレーではあまり感じなかったのですが、日本に戻ってきて感じることは、自分でものを考える人がとても少ないことです。常に答えを求めようとして、正解を答えようとする人が多く、そのメンタリティがものすごく強い。本人が気がつかないうちに成長の過程ですりこまれているように思えます。

正解を求めようとする気持ちに向いている以上は、誰も気が付いていないことには気がつかないし、自分の考えで想像力を働かせることがなかなかできないですね。私が一番仕事を一緒にしたいと思う人は、正解を言い当てることでなく、物事の本質を自分で見極めて、自分なりの考えで正解をこうだと見極めることができる人です。それでいて実現に向けて行動できる人がいちばんほしいですね。

中村:日本の教育を受けているとそういうメンタリティがつかないと思います。

南場:答えは一つだと教わっていますからね。

中村:はい、そうなんです。でも、多くの学生を見て思うことは、評価されるために頑張っている生徒が多くて、“偉い”とか褒めてもらいたい欲求が高いんです。

南場:周りとは違うと怒られるという体験から、みんな周りと一緒にしろとするんですよね。それは、全く無意味じゃないですか？それだったら1人で仕事をしたほうがいいですよ。3人いて、3人とも同じ考えだったら、コストが3倍かかっているだけです。

中村:いつも思うんですけど、その人の欠点はその人の魅力だと。欠点がない人は、おもしろみがないって感じがします。茂木さんなんてとてもおもしろいじゃないですか。先日、エンジンゼロワンに行ってきたんですが、とてもユニークな人の集まりで、自分の考えをみなさんお持ちになっていて、それが個性じゃないですか。ああすごくいいなって感じがしました。学校を設立してみて、多国籍から教師を採用してその多様性のある中で、一番難しかったのが日本人だったんです。日本人の先生方が物事を平均にしようとするんです。そこをどう変えていってか。

南場:やはり日本人はそうやって育ってきましたからね。

中村:今回国際バカロレアの認定を取得する予定ですが、(対談後2015年4月2日認定)それまでの考えの相違が内部にあったということです。外国人は比較的バカロレアに近い教育を受けている人が多いので受け入れやすいのですが、日本人は皆と同じ発想にもっていかうとするんです。

南場:変わった人を排除しようとしていますね。

中村:普通って何?!みんな普通じゃないですよ。世界中には多種多様の人種がいて、考え方があって、先生もいろいろな国籍の人たちがいる。「普通」という言葉がおかしいでしょ。私は「普通の考え」というものが理解しにくいです。日本の教育を変えられない原因は、先生だと思えます。

南場:そういう環境で育った人を変えるのは、なかなか難しいです。戦後日本には、均一した教育が求められていたので、大変複雑な作業を間違えずにアウトプットできる労働力が求められていたのではなかったのですが…

中村:大量生産ってことですよ。

南場:よく考えられた教育制度です。

中村:疑問をもってはいけない!

南場:そうです。

中村:先日大阪大学の大学院生と話す機会があって、その学生は、留学していて一括採用にもれたから大学院に行っているんです。ということを知って、それって就職浪人というのでしょうか?大阪大学の大学院生が私に「僕たち何を頼りにしていけばいいのでしょうか」というのを聞いて、少し悲しくなりました。

南場:それに学部推薦というものもありますよね。

中村:大学の先生の言うことを聞かなければ、推薦状を書かないとか!?

南場:そういうものもありますね。最近学部推薦で決まった学生がある企業に行きたくないといって、うちの会社に入りたいといっってやってきたら、大学からクレームが来た、ということもありました。その学生本人は、学部推薦をもらってその企業にいこうと思っていた時よりも、就活を通じて視野が広がって、DeNAがいいと思ってくれたらしいのですが…

中村:その企業も生徒が学部推薦を断って何だ!ってことになるんでしょうかね?もしそんな企業ならいかないうちがましですよ。

南場:そこは本人の自由じゃないですか?

中村:でも、おかしいですよ!大学がそんなこと決めるって?!本当に学部推薦ってわかりませんね。

南場:まるで学生の人生はどうでもいって思っているみたいですよ。

中村:ほんとに大学が変わらないと…。そういうのを聞くと悲しいですね。

南場:確かに現実問題です。

中村:先ほども話題に出しましたが、大阪大学の学生さんと話をした時、エリートと言われる皆さんが、「何を頼りにしていけばいいのですか?」と聞かれたときに、まずは人を頼るのはやめなさい!!

南場:(笑)

中村:そこから始めよう!

南場:そうです。自分の力を信じて、自分に力をつけることから始めてほしい。

中村:そういう意味で、起業するとき怖くなかったですか?多分、起業する人って怖って思う人は絶対にしないでしょ!

南場:時々そういう質問を学生さんからもらいます。でも、そういう学生さんは、二度と私には近寄らないかな?(笑)

中村:近寄るのが怖い?!

南場:失敗する前に南場さんのことが怖いのかもかもしれません(笑)

中村:でも、失敗の塊ですよ。うちの学校なんかは失敗の連続ですよ!

南場:失敗しないと学ばないでしょ。

中村:とりあえずやってみて、ダメならまた別の方法を考える!

南場:親も企業も変わらないとだめですね。難しいですが、日本の未来のために取り組みがいのあるテーマだと思っています。



世界初！ 国際バカロレア認定！

関西国際学園（神戸校）は、2015年4月2日をもちまして、
正式に国際バカロレア（IB）初等教育プログラム（PYP）の認定校となりました。
日本語でのPYP認定校は、世界で初となります。
今までの皆さまのご支援とご協力に心から感謝すると共に、これは通過点に過ぎず、
今後も世界最高水準の教育を目指して研磨し続けることをお約束します。



国際バカロレアとは

国際バカロレア（IB）は1968年にスイスで創られた財団法人で、幼稚園児から高校生までの国際的な教育プログラムを提供しています。初等教育プログラム（PYP）、中等教育プログラム（MYP）、ディプロマプログラム（DP）、キャリア関連プログラム（CP）の4つのプログラムがあり、特にDPは自国以外の大学進学への道が大きく広がることもあり、日本も含め世界中から注目を集めています。2015年4月現在4127校がIB校としての認定を受けています。IBの理念は「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりを富んだ若者の育成」です。

PYPとは

初等教育プログラム（PYP）は、3歳から12歳を対象とした教育プログラムで、「探究型」と「教科横断型」のカリキュラムが基礎となっています。

「探究型」とは、教師が児童に一方的に教えるのではなく、児童各自の体験や興味を中心に新たな興味を引き出します。「教科横断型」とは、ひとつのテーマを「教科」の枠組みで捉えるのではなく、社会的、言語的、科学的、芸術的など多様な角度で考えることです。

PYPでは6つごとの教科横断・探究ユニット（UOI）を学習します。

小学校6年間の36のユニットの中で、本来国の学習指導要領に含まれる内容を、学校独自に構成しながら網羅していきます。6年生の後半にはPYPの総仕上げとなる「エキシビション」が行われます。普段のPYPの探究は、クラスや学年で定められたテーマで行いますが、エキシビションでは6年生の児童一人ひとりが独自の探究課題に取り組み、保護者や他の児童・教師の前で発表します。認定校となった関西国際学園では2016年1月に初のエキシビションを計画しています。世界中の有名大学進学へ繋がる出口の保証が魅力のDPとは異なり、純粋にプログラムの質の良さが評価され、世界中では1259の学校で導入されています。

認定のための基準

IB校となるためには、IBが各プログラムで定める基準を満たさなければなりません。

IB校認定を目指す学校は、まず「候補校」となるための申請をします。学校としての実態があればどこでも候補校になれます。その後は、各校に配置されるコンサルタントと連携しながら、IBの基準をクリアするために必要な数々の変化を行います。基準を大きく分けると、「理念」、「組織」、「カリキュラム」があり、その中で認定を受けるために必ず達成すべき項目と、取り組んでいることを示すべき項目があり、前者を全て達成できたと学校・コンサルタントが判断したときに認定申請書と共に、基準を満たしている証拠を示す莫大な書類を提出します。数ヵ月後に確認訪問（Verification Visit）があり、通常2名のIB審査員が2日間（大きな学校は3日間の場合もあり）の訪問をし、教師、児童、保護者などからヒアリングを行い、また書類や掲示物などを閲覧して認定基準達成の是非を判断します。そこから6週間程度で通知が学校に届きます。基準が満たされていれば認定校となり、不十分な項目があれば、その基準を満たすための延長期間が設けられ、再度確認訪問が必要となります。認定のために必ず満たすべき基準には、学校の理念がIBの理念と通じていることや、7歳以上の児童全員が第二言語の学習をしていること、教師が定期的に共同で授業の計画を行う時間が確保されていること、教師全員がIB指定の研修を受けていることなどが含まれます。取り組んでいることを示すべき項目には、設備の充実や学習内容のバランス、IBの理念に沿った評価体制の導入、特別支援体制の整備、他のIB校との連携などがあります。

世界初！日本語でのPYP

日本ではIB認定校が32校あり、その中でPYPを実施している学校は他に16校ありますが、全てが英語を主な指導言語とするインターナショナルスクールです。

日本語は第二言語あるいは専科として週に数回の授業があるのみです。関西国際学園では、全児童が言語、算数、理科、社会を英語と日本語で学習しています。

今年の4月からは算数、そして主に理科や社会の分野を学習するUOI(探究ユニット)で、日本人と外国人の両担任がチーム・ティーチングを行い、両言語を使用して授業を行っています。

バイリンガルスクールはたくさんありますが、このような形でPYPを取り入れている学校は見たことがない、とIB関係者にも言われています。

関西国際学園は今のところ日本語及び日英バイリンガルでPYPを学べる世界で唯一の学校です。

関西国際学園の歩み

開校15年目となる節目の年でIB認定を達成しましたが、実は10年ほど前にもPYP認定の取得に挑戦したことがあります。しかし当時は学園の規模も小さく、IBの認知度も日本では全くと言っていいほどありませんでした。PYPを実践するための体制を整えたり保護者の理解を得るにはまだまだ力不足だったため、数年で断念しました。

そして2012年から再度挑戦を始め、その年の9月に候補校となりました。初等部は東大阪にありましたが、2014年に神戸の新在家に移転し、そこで初等部・幼稚園部共にPYPの認定に向けて取り組みました。初等部では2012年まで教科担任制でした。教科横断型を実現するためには、同じ教師が主要科目を教える必要があったため、2013年から学級担任制に移行しました。またPYPに取り組み始めてから、「英語科」、「国語科」と2つに分かれていた部門がより協力し合うようになり、部門化も徐々に消えていき、授業の計画、指導、評価など全てを外国人と日本人の担任が共同で行うようになりました。

これら成果が認められ、候補校になってから2年半という非常に短い期間で認定校となることができました。



日本のIB展開

PYPの形を整えるために数多くの変革を行いました。関西国際学園が2012年からの短い間でPYP認定を達成できたのは、元から明確なビジョンに基づいた国際教育を実施していたからに他なりません。我々のプログラムや体制が決して完璧だったわけではありませんが、確認訪問に来られたIBの審査員は、子どもたちが国際的な視野を持ち、物事をクリティカルに考えて授業で発言している姿や、自信をもって自分たちの学びについて振り返っている姿を数多くの例を出しながら私たち教師に伝えてくれました。教師も皆認定のために粉骨砕身して励みましたが、認定の鍵は実はこの学園の子どもたちだったと気付いたことは非常に大きな喜びでした。

文部科学省は2018年までに200校のIB校認定を目指すことを発表したため、IBに関心を持つ学校が続々と現れました。

IB校が増えるのは素晴らしいことですが、海外への進学や留学生の勧誘のために形を整えるだけでなく、各学校で真の国際人を育てるために積極的に取り組むことが大切です。

いち早くIB校となった私たちが、日本でのIB教育、国際人を育成する教育の普及に少しでもお力添えできれば、関西国際学園として最高の喜びです。

学園長 著書より

ほんとうに求められるのは人間教育

私が企業に勤めていたころ、欧米系の部下に対して間違いを指摘したり、きちんと指示を与えるということができない上司がいました。管理職という立場にありながら、欧米系の外国人に対してどこかで精神的な引け目を感じているのです。それは意味のないへつらいに映ったものです。

私はその管理職に向かっていったことがあります。もちろん役職からいえば私にとっても上司です。「あなたのしていることは、おかしい。そんなことをするから、よけいに見くだされることになってしまう。英語がダメなら、日本語で注意すればいいでしょう」「そうはいうけど、やっぱり緊張するからな」ところが、その管理職もアジアの国々へ行くと、その途端に態度が一変します。

いかにも横柄になって、相手を見下げたような態度をとるのです。「上司に対して、よくいえるねえ」周りからはそういわれたものです。私が女だから、言えたという面もあるのでしょう。いつ辞めてもいい、そういう覚悟があったからです。

男性ならこうはいかなかったかもしれません。いずれにせよ、おかしいと感じるものを黙って見過ごすことができないのです。おかしなことが起こるのは、根拠のない刷り込みがあるからです。偏ったものの見方を無批判のまま受け入れているからです。

どんな場面においても、偏見というものが、私たち自身の暮らしを大きくむしばんでいるものです。

私たちの考えるリーダー像は、国際舞台に立って、今後の日本を背負っていける人物です。力のない人たちや弱い立場の人たちにも、公平な視線を注ぎ、力になってあげることのできる存在です。

「大統領に接するときも、ホームレスに接するときも、同じ態度でいられる人でありなさい」私は子どもたちにそう話します。それがリーダーとして、一流の人として、とるべき態度だからです。

学園を立ち上げたころは、リーダー教育ということについて、私自身、いまほど明確なものがあつたわけではありません。むしろバイリンガルのほうに意識が向いていました。しかし、お話してきたように、知識や技術に秀でていても、それをどこで、どのように使うかをわかっていなければ意味がないのです。自分がだれで、なにをすべきなのか。それを教えることが、私たちの

学園の基本的な教育方針です

「なかなかそれを理解してくれる人はいないよ」身近な人から、そう言われたこともあります。実際、私たちの教育趣旨を保護者の

方々にご理解いただけない場合もありました。「難しいことをいうより、英語教育だけに焦点をあてたほうが、きつとうまくいくよ」「それは私もわかってる。前は企業のなかで顧客ニーズばかり考えていたから」「じゃあ、どうしてそうしないの」といぶかしそうに、そういうのです。

確かに学園経営を考えれば、英語教育だけに絞ったほうが、ニーズが高いことはよくわかっています。しかし、それは「儲かる教育」であって、子どもたちの将来を考えた「正しい教育」ではありません。それに、学園の小学部では、子どもの学年があがるにしたがって、地に足がつかない状態になるお母さんもいらっしゃいます。子どもの中学進学が迫ってきて、受験対策に気がそぞろになるのです。

「とにかく英語、英語が自在に話せるようにしてください」以前はそればかり口にしていたお母さんが、子どもが高学年になると急に「算数をもっと」、「国語が不安」といだし始め、方向性を見失ってしまいます。こうした保護者のニーズに合わせていたら、教育の軸はぶれてしまいます。

私は息子の教育を思い、この学園を立ち上げました。英語によるイマージョン教育と、母国語である日本語教育を並行して行うという教育の仕方は、間違っていないと確信しています。そして、その教育をご理解いただける方たちのために、続けていこうと思っています。

第1章にも書きましたが、日本人が英語を身につけるには、まず日本語できちんと物事を把握していくことが不可欠です。日本語にはこの国の歴史や文化が宿っていて、その理解を深めることで自らのアイデンティティーを確認することができます。そのアイデンティティーなくしては、バイリンガルやそのほかの知識や技術を駆使して、国際舞台で活躍していくことなどおぼつかないのです。

知識や技術を教えるのは、教育のテクニックにすぎません。受験勉強と同じで、カリキュラムを整え、優秀な講師をそろえれば対応できます。しかし、人間教育はそうはいきません。学園と子どもたち、そして保護者の方々がいっしょになって、失敗を味わい苦労を重ねながら身につけていくものです。逆にいえば、それが教育の醍醐味ともいえるのではないのでしょうか。

「子どもを英語バカにしない学校」 中村 久美子 著 ダイアモンド社より